

ソーシャルワーク実習Ⅱを終えて

いただきました。今回が2回目の実習でしたが、前回とは異なる障害福祉分野ということもあり、始まる前はとても緊張していました。

実習では、生活介

護や就労継続支援B型、相談支援、ケア会議など、さまざまな場面に参加させていただきました。初めは、利用者の方とどのように関わればよいのかを考え、質問の仕方や声の掛け方などに意識が向いていました。

しかし、日々関

る中で、上手に話すことだけが利用者理解につながるのではなく、普段の様子や本人の言葉を積み重ねて捉えることが大切だと感じるようになりました。

就労継続支援B型

では、利用者の方一人ひとりの得意なことに合わせて役割がつくられ、それぞれの強みを活かして働いている姿を見ることができました。また、ケア会議では、複数の専門職がそれぞれの立場から意見を出し、一人では捉え

きれない生活をチームで考えていました。こうした経験から、一つの場面だけで判断せず、さまざまな情報をつなげて考えることの大切さを学びました。

スポーツ交流会後

の利用者の方との会話も印象に残っています。私はそれまで、活動について「楽しかっただろう」と肯定的な面に目を向けてやすかったのですが、実際には楽しかったことだけでなく、疲れたことや大変だったことも話し

てくれました。

この経験から、自分の「きつこうだろう」という判断ではなく、本人がどのように感じたのかを確かめることの大切さに気づきました。

さらに、最後には、

利用者の方の代わりにハンドベルの練習に参加しました。実際に活動することで、見ていただけでは分からなかった緊張感や楽しさを感じ、本人の立場に立って考えることの大切さを実感しました。



23日間を通して、

利用者の方を理解することは、目の前の行動だけを見て「分かった」と判断することではないと学びました。本人の言葉や表情、生活歴、周囲

感じました。

今回の実習で得た視点を、これからの大学での学びや今後の実習でも大切にしていきたいです。

社会福祉学科3年
神尾颯志

の環境などに目を向けながら「自分の捉え方は本当に合っているのか」と問い直すことが、利用者の方を理解するための一つの姿勢なのだと